

幼児における他者と自己の情動理解

－ 情動選択及び言語理由付けに基づく分析 －

立命館大学大学院

応用人間科学研究科

対人援助学領域

発達・福祉臨床クラスター

CHEN Tingting (陳 ていてい)

本研究では 3～6 歳の幼児（男：女=30：31；3, 4 歳群 21 名, 4, 5 歳群 18 名, 5, 6 歳群 22 名）を対象に，幼児期における他者情動理解と自己情動理解の関係性及び情動理解の発達プロセスに関して検討した。その課題は，「喜び」，「悲しみ」，「怒り」という 3 つの基本情動について，情動を表す物語を，参加児に紙芝居で説明し，情動選択カードから情動を選択させ，その後，選択した理由を尋ねるのである。主人公が架空の人物である他者情動条件と主人公が参加児である自己情動条件が設定された。情動選択の結果では，他者情動条件と自己情動条件に有意差が見られなかった。他者情動条件も自己情動条件も同程度に年齢につれて発達していくことが示された。また言語による理由付けの結果から，情動理解はレベル①「情動理解の未獲得」（4 歳以前），レベル②「直感的情動理解」（4, 5 歳），レベル③「推論的情動理解」（5, 6 歳，またはそれ以降）というプロセスをたどって発達していくことが示された。

【キー・ワード】 幼児，情動選択，言語的理由付け